「身近な歴史とみちづくり」の夢

地域における歴史を知ることは、今後のまちづくりを行う上で重要な要素です。また少子高齢化やライフスタイルの変化により道路を含む既存社会資本ストックの改変も課題となっております。特に、知らずに過ごしていた地域における歴史の発見と誰でも利用できる楽しいみちづくりとは、一体として考えられないかをテーマとして私が在住している福岡市を例にとり考えて見ました。

■博多湾と市民の結びつき

福岡市は朝鮮半島や中国大陸に最も近いという地の利に恵まれ，古くから交流・文化の玄関口としての機能を果たしてきました。

なかでも博多湾の歴史は，最も古くは弥生時代における奴の国王が後漢に朝貢して光武帝から受けたといわれる金印「漢委奴国王」の出土を初めとし，古墳時代における「防人」の配置，飛鳥・奈良時代における「鴻臚館」，平安時代においては平清盛による日本最初の人工港となる「袖の湊」の築造，鎌倉時代の蒙古襲来，室町時代の豊臣秀吉と博多豪商の関係等，福岡市の歴史そのものと言っても過言ではありません。

江戸時代以降歴史の表舞台から遠ざかったものの，昭和 50 年代に「このままじゃ博多がのうなる」の老人のつぶやきから始まった福岡のまちづくりも地の利を活かした博多港の歴史を土台にしたものでした。特に福岡市市政 100 周年を記念して開催された「アジア太平洋博覧会－福岡'89」は，博多港を舞台に「海に開かれたアジアの拠点都市」をスローガンに国際都市としてのポテンシャルを国内外に示しました。

この様に我が国の歴史と文化を支え，福岡のまちづくりの核となる博多港ですが，ベイサイド開発として多くの拠点が形成されているにも関わらず，全体としての一体性がなく市民にとっては使いづらいレジャー施設群となっております。これは，各施設へのアクセスが自動車に限られる等連絡機能が欠如していると考えられます。

本提案は，福岡の誇りある資源とした博多港を次世代に継承していくために，現在のベイサイド開発拠点相互を有機的に結ぶ「***平成袖の湊***」を形成し，市街地と連動した多様なアクセス軸を確保して「高齢者を含めたすべての人々が交流する賑わいあるレジャー空間」としてベイサイドを復活させることを提案します。

■「***平成袖の湊***」の提案

かつての交流の場「鴻臚館」跡地を起点として，現在の交流の場「福岡ドーム（ホークスタウン）」「福岡タワー」を経て，紛争の場であった「元寇防

塁（小戸ヨットハーバー）」までの特色ある３地区を相互に連絡する自転車歩行者系ネットワークを形成することで新たな施設の連携や隠れた博多にまつわる歴史の発掘と共に新たな交流の場を創出し，博多湾の歴史的価値を次世代に伝える等の多様な利用性が図れると考えます。

① 海の歴史地区
赤坂地区鴻臚館跡を起点とし，途中大濠公園福岡市美術館や万葉集にも歌われた「荒津の埼」（現西公園）,黒門川通りを経由して近代的な地行浜，百道浜地区に至る散策地区を『歴史発見地区』と位置付けます。
また，交通軸となる施設に交流の場相互を結ぶ短距離輸送システムとして「鴻臚館」（唐人町駅）～福岡ドーム～福岡タワーまで整備し，システム自体が集客要素となる様に個室型（４人乗り）ゴンドラを導入して高齢者や身障者の方も抵抗無く利用できる送迎機関の導入がふさわしいと考えます。

② 海辺のレジャー地区
現在，集客数が減少している百道地区と孤立している愛宕浜地区のベイサイド施設を一体運用することで，更なる利用性や魅力の拡大を図ります。
まず，日曜休日に多く見られるビーチバレーや釣り，ウィンドサーフィン，カイトサーフィン，シーカヤック等の利用に対し，シャワーや休憩施設，施設保管庫等の設置を行い，利用者へのサービスに努めます。さらに，百道及び愛宕浜における人工海浜の直結が必要となりますが，導線を分断する室見川に対して（W=5.0m 程度，L=500m 程度）の橋梁を整備が必要となりますが，自転車歩行者専用道路とすることで一体化に伴う建設コストの大幅な縮減（自転車歩行者専用 11 億円，車道併設 36 億円）が図れます。

③ 船のレジャー地区
ベイサイド施設の最西部に位置する小戸地区は，現存する元寇防塁跡や能古島渡船場，姪浜漁港及び小戸・マリノアという二つの最大級のヨットハーバー等が連立した「船」がシンボルとなる地区です。
特に，能古島への唯一のアクセス口である渡船場は，島巡りと観光を兼ね，特に「春の菜の花」と「秋のコスモス」の時期を中心として駐車場等の連絡施設の脆弱さが浮き彫りになっております。このため，前述の 2 地区との一体化を図り，徒歩または自転車によるアクセスを可能とするため，ベイサイド施設であるマリノアから小戸地区防塁跡小戸公園までの西部処理施設場の堤防沿いに自転車歩行者専用道路を整備することが必要となります。
これらにより船を中心とした海洋性レジャーを再発見すると共に福岡市のスローガンである「海に開かれたアジアの拠点都市」として「海」との共存が一層アピール出来ると考えられます。

④ 市街地からのネットワーク
上記ベイサイド施設への利用性を高めるために，市街地からの自転車歩行者導線と連絡が必要不可欠になります。

ひとつは，「歴史発見地区」における新システムを提案しておりますが，西地区には室見川沿いの河畔公園が内陸からの散策コースとしてふさわしいと思われます。現在河畔公園は，よかトピアとおり（都市計画道路 3.3.148 豊浜小戸線）まで断続的に整備されていますので，豊浜地区の一部整備で可能と考えられます。

■さいごに

福岡市は，九州における住みたい街のひとつと言われていますが，これは職住環境，街並みや交通など，ハードの部分の評価であると考えられます。今後少子高齢化を迎えるにあたり，職住と共に，様々なライフステージ・ライフスタイルに対応した***市民の憩い***を主軸としたまちづくりが更に必要になってくると考えられます。さらに地域の歴史・文化を次世代に伝え，レジャーを通した青少年の育成にも活用されると考えられます。

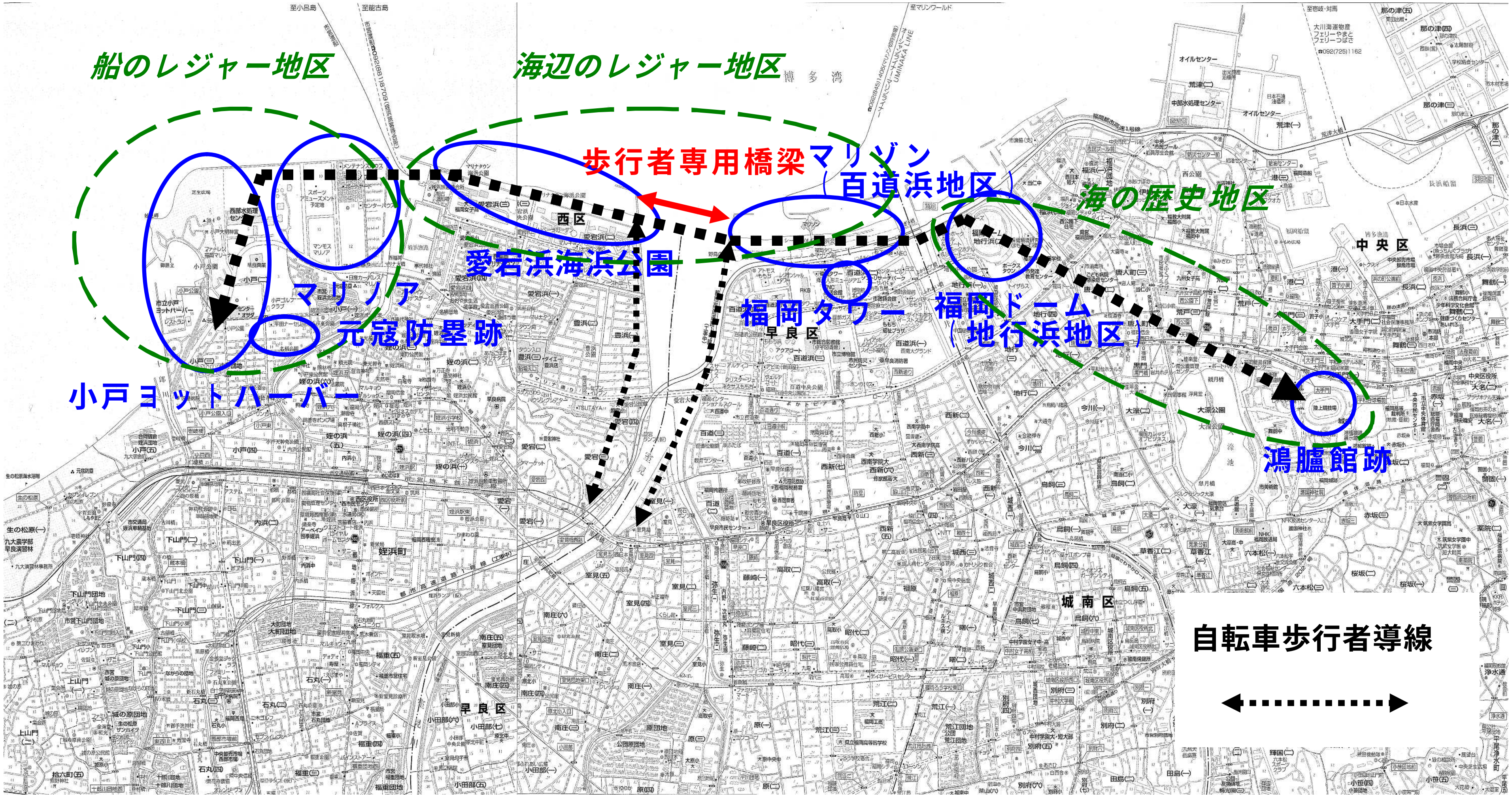
整備済みの社会資本ストックも時代にあった内容へと形を変えて有効利用することは，今後の重要な課題となっております。本提案内容は，現在のストックを大きく変えることなく有効活用する発想と，散策を単に「見物して回る」から「体験出来て楽しみ隠れた地域の歴史も発見する」の体験型散策への転換を視点に発案いたしました。

現在，福岡市においては，少子高齢化対策と共に，子育や地域コミュニティーへの施策も展開されております。さらに，自然への希求や精神的な価値も重要視されている今日，地域の歴史と共にレジャー・スポーツを通じてそれらの要求に対応できることは，福岡市民にとって大変有意義なものになると考えられます。

みちづくりについて、福岡市を一例に夢を提案してみましたが、九州各地における都市についても固有の歴史や風土を活かした楽しいみちづくりが可能と思われます。特に、地域の住民と一体となり整備を行うことで、誇りある郷土愛を育てるとともに、みち自体を大切にすることが出来るのではないでしょうか。

以上

■全体構想図


船のレジャー地区
海辺のレジャー地区
歩行者専用橋梁
マリゾン
（百道浜地区）
海の歴史地区
愛宕浜海浜公園
マリノア
元寇防塁跡
福岡タワー
福岡ドーム
（地行浜地区）
小戸ヨットハーバー
鴻臚館跡
自転車歩行者導線